

やくしまに 暮らして

ネイチャーガイド
大野 睦



第十四章 青年

このまちで暮らすこと

人口14000人足らずの屋久島。小さなまちでも様々な行事がある。むしろ小さなまちだからこそ、様々なイベントでいつもその準備をしたりする人は限られていて、そんな人たちによって島のイベントは支えられている。私は仕事柄、どうしても運動会などに参加することが出来ていない。屋久島に暮らして何年か過ぎた頃、島で一番大きなお祭りにいつも参加できないことになんとか後ろめたさを感じるようになっていた。そこまでして仕事をするべきなのか？そう思うようになっていた頃、お祭りの実行委員会のボランティアメンバーに入れてもらうことが出来た。初めて住民とし

て認められた気がして本当に嬉しかったのを覚えている。それからは毎年ボランティアスタッフだけで揃えた法被を羽織り、このお祭りの実行委員会メンバーの方々と準備や片付けの手伝いを少しだけさせてもらうようになる。もちろん、お祭りを見て楽しんでという参加の形もあるとは思いますが、私にとっては実行委員会の方々と一緒に何か出来ることが嬉しい。今でも他の行事などには殆ど関わることは出来ていないが、小さなまちの中で青年世代が関わっていくことで少しずつ世代交代してゆくことは大きな意味があるのだと思う。



青年会議所との出会い



2011年、屋久島に青年会議所を設立しようという動きが生まれた。それまでも今も屋久島の青年世代といえば商工会青年部に所属し、前述のお祭りなどでも活躍していた。若者の少ない小さなまちである。いくつもの組織が出来ることには懸念の声も上がったが、それでも明るい豊かな社会の実現を目指し、2011年7月に屋久島青年会議所が設立される。この時も声をかけていただき、私は設立メンバーに入れて

もらうことが出来た。屋久島青年会議所のメンバーの殆どは商工会青年部とのかけもちをしており、既に続いている行事やイベントではそちらでの活動となり、青年会議所では独自の活動を見出す必要があった。あまり目につくことはないかもしれないけれど、このまちにとって良いと思うことを少ない人数でもやってみることに意味があると信じての活動を続けて行こうと、少しずつ小さなことから活動が始まった。



40歳になり

青年会議所は世界中でその活動が行われているが、20歳から40歳までと限られており、それぞれの任務も単年度制となっている。今年40歳になった私は設立メンバーの中でも真っ先に卒業をひかえている。その最後の年に私は理事長という役職をいただいた。出来たばかりで何をしている組織なのか、その存在意義を他に知ってもらうためにはこれからという時であるが、それは残るメンバーに託して卒業を迎えるのである。この青年会議所活動は私にとって今という時を考える機会を与えてくれた。それまでは仕事に追われたりしているうちに日々が過ぎてゆくことに言い訳ばかりを探していた気がする。

思えば、そんな感覚は社会人になると忘れがちだということに気付かされた。そして、まさに大学を卒業して社会人になると

きに味わった緊張感を今抱いている。それはもう青年ではない、ということ。若さという言い訳がもう通用しない。これからが本当に社会に出るとのことなのかもしれない。

大野 睦 BLOG やくしまに暮らして

<http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

